



國文

◎運動

文科三年 古賀まつよ

煙霞洋々たる長春を謳ふ小鳥、歴亂たる秋草の下に幽語をもらす吟虫、何れかその運動を有せざらん。一滴の水を世界として數も知られず生ずる動物すら、相應の運動を有すといふ。運動は實に生きとして生けるもの第一要件なりされば生物の長たる人は身体の構造最運動に便にして他の如何なるものも及ばざる輕妙複雑なる運動をなすを得るものなり。

抑運動にもその種類々あるべし、先人の最初に取りしものは生存の必要にせまられたるものにして未開の時代に於て食物を得んが爲に山川に

漁獵し他の危害を禦がむ爲めになどによれるものなり、然れども社會の狀態複雑となるに従ひて分れて各種の職業となり、自ら生存必須の運動に用ふる勢力の餘を生じたり、此に於て人は業務の上に遊戯を發明して、それをこれに漏すに至れり。かくて文明の程度進むに従ひ一種の技術を作り出せり、武藝遊藝などいふは即これにして殊に武藝は運動として殆理想的のものといふべし、尙近時一種の整然たる秩序を立てたる聯合的運動盛に行はるゝに至れりそはいふまでなく体操なり。

かく運動には所謂仕事に屬するもの、遊戯、技術、体操等種々ありと雖、何れも身体を練りその發達をたすけて、精神のよき使役者たらしめ、又よき案内者たらしむるは勿論、精神をも常に敏

活爽快にして、眞に健全なる身体と健全なる精神とを具備する人格を作るを得しむるものなり。而して第一者は人類社會の生存上必須なるものにして、第二者は生活の勞に疲れたる心身の唯一の治療者となり、又間接には社會の文明に裨益し殊に幼兒の發達はこれによるもの多し。また第三者は一は優美なる性情を養ひ、一は金鐵の体軀と磐石の心膽とをねらんとするに最効あるものにして、第四者は運動中最身体の調和的發達を圖りて各自の體質をして理想の域に達せしめ、併せて團体的行爲に適する心身を得しめんとするものなり。かくの如くして得たる運動の結果は人をして個人として幸福なる樂天生活を遂げ社會に向つては有爲の材として人生の意義を完うするを得しむべし。かく考へ來れば運動は實に人生に必須なる無形の食物といふべし。

蓋從來の教育に於ては比較的精神を重じそのよりて來る身体を忽にせしを以て意を運動に用ゆること頗淺かりき。されど輓近文明の進歩著し

きに伴ひ心力の需要の途益多きを加ふるに當り、漸く運動の重んぜられ來るはよるこばしき事といふべし。然れども体力に相應せざる過度の運動は却りて害をなすものなれば、よくその度を制し且休息をとることを忘るべからず、殊に遊戯は時として精神の靈害となることなきにしもあらざれば、かゝる點に就きては又相當の注意を要するものあるべし。

◎歸省

文科四年 芳賀晴

歸省ほど楽しきものはあらじかし如何に苦しきことある時も故郷の二字には慰めらるゝなり友どちうちつどひて楽しきまごゐる時は必ず談の家郷に及ばぬことなく父母はかくしておはすらむ弟妹はどして過ぐすらむと思ひやる時はえもいはぬ感のもよほさるゝものなり。實に望郷の念は遊子の片時も忘るゝあたはざる所にして殊にこのおもひの切なるは暑中休暇前十數日の間なり。

試験終りて休暇となれば朝よりの外出校門の出入絶ゆることなく手に手に携へ来るは皆郷里への苞なり。吾はかゝるものを購ひ來りぬと示せば余はそれにもまさるものを求めつと互に出しあふもをかし。あゝこの品々行李の中より取り出でて父母にさげ弟妹にあたへて喜ばるゝ時のうれしさ目のあたりなる心地してその夜はまつ夢に見るらむいと樂し。

幾百里の汽車の旅、車内の人々老いたる若き何れにつけても家庭の人々と比へ見ては想像をめぐらし窓外の景色千變萬化山來り谷むかへ畑さり川過ぎ或は稻田に青々たるけしき草苺る童馬追ふ男等目にふるゝものは皆明日見む故郷をしのぶべき種とならぬはなし。汽車を下りて車をかり我が村に近づけば逢ふ人毎にうちゑまひ會釋するも何となく心地よし門邊に迎ふる弟妹の姿見えそめしほどのうれしさはた戸口にむかへて無事を祝ひたまふ父母の一言實に如何なるよろこびもこれには若かざるべし。かくて千里の山川へだてて遙かにしたひまつり

し父母に朝夕つかへまつりて其の暖き情に接し愛らしき弟妹と起居をともにしうちかたらしひ或は連れたちて小川のほとりにそゞろあるきし或は公園に遊びて都の上野日比谷等のさまをかたも實に心ゆくかぎりなり。あゝわれら常に寄宿舎にあり屑々として餘裕なき身のたまたま廣き野原の景色を見渡し靜なる山水の間遊びては自ら氣ものごかに心もゆたかになりぬるをおぼゆまして家庭團樂の樂にいたりては何ものかこれに比するを得む。

●鴉片戰爭

文科四年 山川はつの

弱之肉強之食とこれ古今一轍なり唯、古に於ては多くは暴力に訴へ今に於ては術計に依ると多きのみ而して吾人は常に之を個人の間にかけるよりも更に世界列國の國交的關係に於てその最甚しきを視る十八世紀の初めより英國は印度を蠶食し次いで緬甸を領し更に東進してその勢力を支那に伸ばさむとせり抑、支那と英國との交通

は十七世紀の初めにありて其の後時には中絶し時には厦門に於て貿易せしかど微々たるものなりき然るに西曆一千六百八十五年廣東を以て互市場と定むるに及び頻りに印度の鴉片輸入其隆盛なると遠く他を凌駕せり今鴉片輸入の沿革をたづぬるに其の最初は九世紀の始め唐の中葉に當りてアラビア人罌粟を支那に輸入せしか十五世紀の末に至りては葡萄牙人之をアラビアより支那に轉賣せり明末に至り會、煙草吸用禁止令の發布あり是に於て鴉片吸用の惡風生し清初に及びて漸く盛となりぬ雍正乾隆之際屢、之を禁せしかど尙止まず英人の印度を奪ひ東印度會社其の商權を掌握するに及び鴉片の輸入益、盛となり禁令其の効なしかくて清國の生民鴉片吸用の爲に漸く懶惰に陥り賤貨の濫出頗る多きに至りぬ此の時に當りて林則徐といふ者之を憂ひて上奏するところあり困りて清帝則徐をして兩廣總督たらしむ則徐乃ち命を奉し直ちに禁令を諸外商に布き廣東の英人をして其の所有の鴉片を出さしめその三千餘函を燒却し且つ英國商人の

貿易を禁し以て弊害の根柢を絶たんとせり英國これ聞きて大に憤り遂に開戦を布告しゴルドン・ブレールメルを指揮官とし大に舟師を發して澳門に入寇せり是實に千八百四十年六月也かくて舟山島を占領し轉して乍浦を攻め寧波を侵す而して別將エリオットは直ちに渤海に入り白河に進み直隸巡撫に會見して國書の傳達を求めたり是に於て清帝は罪を則徐に歸してその職を奪ひ琦善を以て欽差大臣として廣東に於て和を議せしめたり事未だ決せざるに翌年二月戰端復開け英軍廣東を侵し北上して香港厦門を攻撃し定海鎮海寧波を略し更に後繼軍と合して六月遂に上海を陥れぬ清國水師提督陳化成勇戦して之に死す軍進みて鎮江を奪ひ更に長江を溯り八月全軍南京府外に著しぬ是に於て清廷大に震駭し著英伊犁布を派して英國全權公使ポッチンジャーと南京に會して和を議せしめぬ曰く一、清國政府は軍費及び鴉片燒棄の賠償として金二千一百万兩を出し二、廣東厦門間福州寧波上海の五港を開き英國國民の通商竝に居住を許し猥りに關稅を課せ